



T. S. エリオットとF. R. リーヴィス (1) : D. H.  
ロレンスの評価をめぐって

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 北海道教育大学<br>公開日: 2012-11-07<br>キーワード:<br>作成者: 石田, 洋至<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.32150/00003897">https://doi.org/10.32150/00003897</a>           |

## T. S. エリオットと F. R. リーヴィス(1)

— D. H. ロレンスの評価をめぐって —

石 田 洋 至

### I

T. S. エリオットによる D. H. ロレンスに対する批判の書『異神を求めて』<sup>(1)</sup>が出版されたのは、1934年のことであった。この時、ロレンスは既に世を去っていた。イギリス文学史上、20世紀はエリオットとロレンスの時代と言われるが、このふたりはさまざまな点で対照をなし、相対立する面を持っている。もしもロレンスが1934年に生きていれば、ふたりの間で激しい文学論争が展開されたことであろう。しかし、「私はロレンスの同胞である」<sup>(2)</sup>と宣言し、ロレンスを擁護する立場から、『異神を求めて』で示されたエリオットの見解に批判を加えたのが、F. R. リーヴィスである。エリオットとリーヴィスの論争は、エリオットとロレンスの代理論争とも言えるであろう。

本論では、ティヴァートン神父の著書『D. H. ロレンスと人間の存在』<sup>(3)</sup>に寄せたエリオットの序文と、それに対するリーヴィスのエリオット批判を検討し、ふたりのロレンスの評価の相違と、その根拠について考察する。

### II

エリオットは、序文を寄せるひとつの理由は、「新しい見地から、ロレンスの作品が研究されなければならない」<sup>(4)</sup>からであるとして、次のように彼の見解を示す。

ロレンスは短気で衝動的な男であった（あるいはそうであったと私は想像する。というのは、この本の著者と同様、私は彼に会ったことがないからである）。彼は推論する能力の持主というよりむしろ、発作的で深い洞察力の持主であった。そういうわけで彼は短気な男であった。ほとんどの同時代の人にもまったく受け入れ難い形式で、時には、ほとんど故意に誤解を促進するような形式で、彼はいくつかの洞察を表現した。愚かな者や、悪意をいだく者が、彼を冒瀆者、「ファシスト」、好色家とみなそうとしても、ロレンスはそういう人々を説得しようと自ら乗り出して行くつもりもなかった。彼はしばしば（私が思うに）無知と偏見により、あるいは、意識下に現われた洞察から、意識的精神に誤った結論を引き出すことにより、誤りを犯した。そして表面的な誤りと根本的な真実とを切り離すには時間がかかるであろう。また、私にとっても、彼はしばしばひどい悪文を書いているように思われる。しかし、ときどき立派な文を書くために、しばしば悪文を書かなければならなかった作家のように思われる。誤解を受けたあとで、彼は無視されるという危険にさらされている。彼の宗教的態度について（その発展について、この本の著者は何か言いたいことがあるのだが）我々は今、敵意というより、無知がどれほどのものであったかということを知りかけている。というのは、ロレンスは、どれだけ物を知っていないかということ

に気付いていないという意味で無知な男であった。<sup>(5)</sup>

この見解の中で述べられているのは、ロレンスは「衝動的な男で、…推論する能力の持主というよりもむしろ、発作的で深い洞察力の持主」であり、「無知と偏見により、…誤りを犯し」、宗教に関しては「敵意というより、無知」が大きな役割を果たした、ということになる。この見解は決してロレンスに対して好意的ではない。また、彼を「冒瀆者」、「ファシスト」、好色家」とみなす誤った評価を否定し、正しい評価につながる「新しい見地」からの見解と言えるであろうか。『異神を求めて』においてエリオットは、ロレンスの欠点は、「労働者階級の子供として育ったという階級から生じる欠陥」、「教育によって与えられる正しい思考法の欠如」、「非国教徒の宗教的環境の問題」から生じていると述べたが、この見解と序文の中で示した見解との間に変化があるのであろうか。リーヴィスはこの点に関して、次のように指摘している。

それで、エリオット氏がその著書で述べていることのいくつかを思い出してみよう。無知の非難と直接関係のある判断と主張を取り上げてみる。「問題となる点は、ロレンスが伝統とか制度のいかなる制約にも完全に束縛されないで人生を始めたということだ…」と書かれている。「知識というよりはむしろ教育が与えなければならない批評能力、ふつう思考と呼ばれているものに対する無能力」に彼は苦しんだ。またエリオット氏は、ロレンスの「知的、社会的訓練の欠如」についても触れている。ロレンスの母に言及していることから、エリオット氏がこの「社会的訓練の欠如」ということで何を語ろうとしていたかがうかがえる。「息子たちの行動を吟味するためのしっかりとした原理原則を彼女に与えたようには思えない漠然とした讚美歌好きの敬虔ぶり」についても語っている。つまり、ロレンスは労働者階級であり、事実炭坑夫の息子であった、だから、無知と粗暴と精神的野蛮さと道徳的不潔さのただ中で育てられ、文化的な生活が生み出したより人道的な成果のすべてを受け継ぐ機会を奪われていた、ということになるのである。「生きた、中心的な伝統の環境のうちに育てられなかったことが、文学者を不具にする効果の極端な事例」として彼を見なければならぬというのである。<sup>(6)</sup>

エリオットの序文では、こうしたロレンス批判は「いまそれほど攻撃的に表わされていないにしても、もっと陰険になっている、ロレンス研究を勧めるということと関連しているため、もっと陰険になっている」<sup>(7)</sup>とし、エリオットの態度は修正も訂正も取り消しもされておらず、「すでに長期間にわたって害悪を働いてきた誤解、偽った説明、誤った方向づけをずうっと維持している」<sup>(8)</sup>と、リーヴィスは断定する。

### III

エリオットはアメリカ貴族とも言える家柄の出身で、新興の実業家階級に属し——ロレンスの生まれ育った炭坑の村の経営者を連想させるが——、幾人もの使用人——料理人、下女中、乳母、洗濯女、庭師——が働いている家庭で育った。典型的な後期ヴィクトリア朝の上流階級の家庭であった。エリオットのまわりにあったのは、『カクテル・パーティ』<sup>(9)</sup>に見られる環境であった。文学的に言えば、主知的な人生態度をとる「ブルームズベリー・グループ」<sup>(10)</sup>の持つ雰囲気はエリオットの育った環境であったと言えるであろう。こうした知的な人間に対するロレンスの批判は、彼の作品においてばかりでなく、あらゆる機会に述べられている。

ロレンスは炭坑夫の息子であった。しかし、ロレンスが労働者階級の出身であり、たとえエリオットが育った環境に育たなかったとしても、エリオットの環境を理解できなかったことになるのであろうか。たとえば、「無知」とは何を基準として「無知」であるのかという疑問が生じる。「粗暴と精神的野蛮さと道徳的不潔さ」についても同様である。

あのような天才を身につけて、1880年代にイーストウッドで炭坑夫の息子として生まれたことは、あたかも運命が、彼に天才を与えたので、彼にその天才を最大限に発展させることができ、その天才を本来意図された目的のために使用する資格を与えるように、前もって配慮していたかのようなのである。もし彼が労働者階級に生まれていなかったら、彼は内側から労働者階級の生活を知ることではできなかったであろう。実際には、中産階級に生まれた作家が持ち得なかった利点を享受した。積極的な経験と、幻想と人を衰弱させる無知の感覚を免がれた自由とを享受した。他方では、彼は才能に恵まれていたので、彼が他の社会水準の生活を知るようになるのを妨げるものは何もなかった。<sup>(11)</sup>

ロレンスは労働者階級の生活を知りつくしていた。『息子と恋人』<sup>(12)</sup>における父親や炭坑夫たちの生活や、『チャタレー夫人の恋人』<sup>(13)</sup>におけるむなしくストライキを繰り返す炭坑夫たちの生活（ある意味では、エリオットの言う「粗暴と精神的野蛮さ」に当たるのかもしれないが）がみごとに描き出されている。しかも重要なことは、ロレンスはこうした労働者階級に属する炭坑夫たちの生活を否定的に捉えていることである。十分知りつくしてはいるが、決してそれをロレンス自身の生活の尺度、基準とはしていないのである。ロレンスの周囲にいたのはこうした炭坑夫たちだけではない。彼の母親の厳格なピューリタンの生活態度は、息子に「道徳的不潔さ」のまっただ中に生きていくことを許さないものであり、事実、ロレンスの生き方からは、「道徳的不潔さ」をうかがわせるものは何もないと言ってよいほどであった。

炭坑町の周囲には炭坑ばかりではなく美しい自然もあった。炭坑経営者の住む館もあった。妹エイダが証言しているように<sup>(14)</sup>、ロレンスの自然に対する観察力は、他に例のない感受性を伴った、鋭いものであった。リーヴィスの言う「彼は才能に恵まれていた」というのは、この観察力を指すのであろう。炭坑経営者の住む館、そしてそこに住む人々を、この観察力でロレンスは看破していたのであり、「彼が他の社会水準の生活を知るようになるのを妨げるものは何もなかった」のである。ただ、ロレンスの中産階級とそれに属する人々に対する評価は否定的である。こうしたロレンスの見解は、「文化的な生活が生み出したより人道的な成果のすべてを受け継ぐ機会を奪われていた」結果から生じているのであり、これがロレンスを「生きた、中心的な伝統の環境のうちに育てられなかったことが、文学者を不具にする効果の極端な事例」としているのだと、エリオットは考えているのである。

#### IV

「知識というよりはむしろ教育が与えなければならない批評能力、ふつう思考と呼ばれているものに対する無能力」がロレンスの欠点であるとエリオットは言っている。エリオットはロレンスの「インテリジェンス」を問題とするが、この場合、「インテリジェンス」を知識に裏付けられた知性を考えているようである。ハーヴァード、ソルボンヌ、オックスフォードと世界で一流の大学で学んだエリオットは、知識に関しては、2年課程のノッティンガム大学師範部の高等教育しか受けなかつ

たロレンスよりは優れていたかもしれない。しかしロレンスの知性は、エリオットが考えているような知性ではないことは明らかである。ロレンスの知性は、知識を含めたいろいろな要素に裏付けられているのである。

1890年代の若者にとって、知的教育は社会的訓練と密接に結びつけられていた。そしてその社会的訓練が、たとえ彼らにウインチェスターやイトンやハーヴァードの風習すら与えなかったとしても、エリオット氏が享受したものより劣っているという理由を私は理解できない。更に、『カクテル・パーティ』から判断すると、エリオット氏が存在したと想像することができないような家庭生活、つまり、貧困と日々の糧を急いで手に入れなければならないということに悩まされながらも、まったく洗練された文化的な家庭生活の環境のうちに、彼らは集い、語らい、読書したのであった。更に、それがイギリス文学に対してどれほどの有利な結果をもたらしたかということについては、私は既に多少指摘しておいたが、ロレンスは日常生活において身近な経験として、古い農業的なイギリスと産業的なイギリスの対立と浸透、すなわち、有機的な形態やリズムや人道的適応の昔ながらの美しさと、そこで起ったものとの対照を知っていたのである。<sup>(15)</sup>

「古い農業的なイギリスと産業的なイギリスの対立と浸透」、そしてそのふたつのイギリスの持つ本質の対照が重要なのである。ロレンスの生まれ育った村とその周囲には、「古い農業的イギリス」にあたる「ハッグズ・ファーム」<sup>(16)</sup>、「ムアーグリーン・レゼヴファー」<sup>(17)</sup>、「フェリーミル・ファーム」<sup>(18)</sup>がある。「また、産業的なイギリス」にあたる「ラム・クロス・ハウス」<sup>(19)</sup>、「プリズリー・コリアリー」<sup>(20)</sup>などの炭坑がある。イギリス社会の持つこのふたつの面こそがロレンス文学の中核をなしているのであり、このことを十分理解していなければロレンス研究は成立し得ないと、リーヴィスは考えているのである。つまり、エリオットはイギリス文学を構成するふたつの社会的要素を理解しておらず、「産業的なイギリス」がもたらした成果、しかも、その成果の一部を彼の視点としてロレンスを批評しているということになるのである。

知的訓練に関しては、それをロレンスは欠いてはいなかったと私は主張した（ティヴァートン神父はこの点ではエリオット氏と反対の意見で、私と意見を同じくせざるを得なかったと言っている）。我々は承知していることだが、ロレンスは正規の学問水準を知ることを拒否されてはいなかった。彼はノッティンガム大学師範部についていくらかの痛烈なことを言っているが、彼には与えられた機会を比類なきまで利用する適性があった。そして正規の勉学と、知的にも社会的にも打ち解けた交際において、彼はその機会をうまく利用したことを我々は知っている。一体どのような根拠に基づいて、エリオット氏が21才の時の彼自身が同じ年令のロレンスより、知的によりよく訓練されていたのは明らかであると思ひこむことができたのか（彼が思いこんでいるととしての話だが——彼の口調からして思いこんでいるとしか考えられないのだが）、私には理解できない。<sup>(21)</sup>

エリオットが、ロレンスは「推論する能力の持ち主というよりもむしろ、発作的で深い洞察力の持ち主であった」と評する時、彼の考えの基となっているのは、ロレンスには教育によって与えられるべき知識が欠けているということであったように思われる。それで、「発作的で深い洞察力」でロレンスが表現することは、時には的を得ていることもあるが、はずれることも多々あり、一般の知識（エリオットの言う知識）からは、とうてい考えられないような結論を引き出しているという

ことになる。その結果、「ときどき立派な文を書くために、しばしば悪文を書かなければならなかった」という批評になる。つまり、ロレンスは、「無知により誤りを犯した」とエリオットは言えるのである。

リーヴィスによると、ロレンスに関しては、エリオットの考える知識については何ら問題はないのであって、ロレンスをロレンスにしているのは、ロレンスの持つ知識ではなく、ロレンスの知性なのである。リーヴィスの考える知識と知性の区別は次の一節からもうかがえる。

1920年代において、ロレンスは天才の持ち主であるということは一般的に認められていた。しかし、知性に関しては、それがほんとうに重要なのであるが、それを求めるためにはオルガス・ハックスレイに赴かねばならないと一般的に認められていた。私自身は——当然明らかであると考へざるを得ないのであるが——ロレンスの知性は数ある中でも、最高の知性であると主張しなければならないと常に感じていた。<sup>(22)</sup>

ロレンスの知性は、一般的、常識的知性ではなく、「本質的に創造的芸術家の知性」<sup>(23)</sup>なのであり、「精神の健康と健全さの条件を明らかにする」<sup>(24)</sup>ための知性なのである。ロレンスが作品の中でよく示しているように、「知性を適切に用いなければ、心的、感情的健康の問題の解決はあり得ないことを、ロレンスは明らかにしているのである」。<sup>(25)</sup>

ロレンスの「洞察力」は、天才のみがなし得るように、そこにあるものを見ることができるといったようなものであった。そして、いろいろな洞察を関連づける並はずれた能力、把握認識し難い要素を含む事態を理解するばかりではなく、経験のまったく包括的な全領域を理解する並みはずれた能力を伴うものであった。事実、彼の思考は、一般に思考と呼ばれているものよりずっと優れているので、まったく思考と認識されないようであった。もし「推論する能力」が何かに値するものを意味するならば、ロレンスの推論する能力が最高のもののように思われる。論理的持久力の点で、つまり、広大で困難な領域にあっても、同時に、非常に具体的な経験の複雑さに対して完全に忠実である持続的一貫性を持って、思考の体系的過程を追求する能力の点で、ロレンスはエリオット氏より優れているように思われる。<sup>(26)</sup>

ロレンスの思考こそが、一貫性を持った論理的体系化を可能にしているのだとリーヴィスは言っているのである。

## V

「彼の宗教的態度について我々は今、敵意というより、無知がどれほどのものであったかということを知りかけている。というのは、ロレンスは、どれほど物を知っていないかということに気付いていないという意味で無知な男であった」。宗教に関して、これがロレンスに対するエリオットの見解である。

ロレンスの母は清教徒風な宗教心を持ち、この厳格な宗教心から子供たちを連れて、近くにある「組合教会派の教会」(Congregational Church) に必ず出席していた。ロレンスにとって、この宗教的風土は大きな意味を持っている。

ロレンスの母の宗教は、エリオット氏が軽蔑をこめてしりぞけるには値しないと言え、ここでは十分であろう。組合教会は、ロレンスの生活圏にあっては、力強い社会生活の中心であり、エリオット氏があのように軽蔑する宗教的伝統を、その主要な推進力としている、いまもなお持続している文化的伝統の焦点であった。ロレンスが実際行なったように、その伝統の真剣さと道徳的まじめさを不とう不屈の知的探求の強化に転ずることは、すべてその伝統の中にあった。ロレンス家が組合教会信者であることは、関連する重要な点である——彼らの非国教主義は、エリオット氏が考えているように思われる卑しく、安っぽい教会の救済思想とはおよそほど遠いものであった。組合教会主義には独得なほど強い知的伝統があった。<sup>(27)</sup>

宗教上「アングロ・カトリック」(Anglo-Catholic)の立場をとるとしても、組合教会から独立した「ユニテリアン派」(Unitarian)の家庭に育ったエリオットが、非国教主義を理解できないとは思われない。「アングロ・カトリック」の立場に立つことが、エリオットにとって、知的に有利であったのであろうか。知識としての宗教が、生活の実感として身についた宗教より優れているかどうかということが問題となるのである。

宗教に関して、ロレンスに浴びせられた非難は、カトリックやイギリス国教会の関係者からの非難であった。ティヴァートン神父はこうした非難を柔げる目的で『D. H. ロレンスと人間の存在』を書いたのであり、ロレンスはキリスト教徒にとって役立つと言うのである。

最初に率直に示さなければならないこの書をしたためるもうひとつの理由は、特にキリスト教徒の立場からロレンスを取り上げ、全貌を明らかにするロレンス研究がひとつもないように思われるからである。このことが、直ちに、宗教裁判的文学批評の形態を意味しないように、この立場から彼を取り上げる第一の目的は、非常に多くのキリスト教徒から浴びせられた悪口を考慮すると、その方面からのいくつかの修正の機が熟しすぎているように思われるということ、急いで付け加えられなければならない。<sup>(28)</sup>

その修正のひとつが、「キリスト教徒が知ってはいるが忘れてしまった教訓を、ロレンスはキリスト教徒に教えることができる」<sup>(29)</sup>ということである。ロレンスのキリスト教に関する発言は、神学上、誤った知識に基づいてはいるが、そして多くのキリスト教徒はロレンスに反発し、非難を浴びせたが、結果として、キリスト教徒が忘れてしまっていたものを思い出させたという点で、ロレンスはキリスト教に貢献しているし、評価できるといのである。この点に関し皮肉をこめて、エリオットは次のように言っている。

キリスト教に対する（そして実に仏教に対する）彼の非難は、しばしば、不十分な知識によるものであった。ある時は、そうした非難は物事の核心をついていることもある。そして、いかなるキリスト教徒も、自分が十分宗教的精神を持っていると確信すべきではないし、キリスト教徒ではないが、根本的に、そして常に宗教的であるひとりの男の批評を無視すべきではない。<sup>(30)</sup>

組合教会の宗教的雰囲気の中で育ったことに関して、ロレンスは次のように述べている。

子供が、その環境や教育に関して、何を受け入れ、何を受け入れないのかを決するのは、一番難しい。子供の時、私が覚え、決して忘れることのない讚美歌に関して、この事実は直接私に

あてはまる。私にとって讚美歌は最もすばらしい詩以上のものを意味し、どういうわけか私にとって永遠の価値を持っている。ワーズワースの『不滅への頌歌』、キーツの頌歌…のような私にとって最も意味のある詩、結局、人に究極的な生き方を与える美しい詩、つまり、人間の意識の中に深く織りこまれるすべてのこれらの詩は、私が幼少の頃、徹底的に私の中に浸透しているかなり平凡な非国教徒の讚美歌ほど深く、私の中に織りこまれなかった。<sup>(31)</sup>

ロレンスの意識の中に浸透した宗教は、知識としての宗教ではなく、自然にロレンスの中に浸透した宗教である。だから、ロレンスにとって「讚美歌は、はっきりとした驚きのうちに、人の意識の深いところで生き輝くのである。なぜなら、讚美歌はいかなる批判、分析にさらされることがなかったからである」<sup>(32)</sup>。知識としての宗教に関してロレンスは、「16才の頃までには、私はキリスト教の教義を批判し、乗り越えていた」<sup>(33)</sup>と言うのである。ロレンスにとってキリスト教は、彼自身の血であり、肉であり、彼にとって不可分なものであり、彼自身から遊離しない、生いたちの中で彼自身の中に浸透した宗教こそがロレンスにとっての宗教なのであった。その宗教は理論でも知識でもないのである。

現在、我々の文明の偉大で決定的な成果は——それは知識を基盤とし、経験に敵対する文明なのであるが——退屈なものである。すべての我々のすばらしい教育と学習は、すばらしい大規模な退屈さを生み出している。現代人は心の中では退屈している。何をしようとも退屈なのである。

現代人は、何も経験しないために、退屈なのである。不思議に思う心がないから、現代人は何も経験しないのである。不思議に思う心がなくなれば、死んだも同然である。これからは、虫けらとしてしか生きられない。<sup>(34)</sup>

カトリック教徒、英国国教会信者、そしてエリオットを怒らせたのは、次のようなロレンスの発言であろう。

清教徒として育てられたことは、すばらしいことであつたと思う。清教徒の中でも非国教徒として、非国教徒の中でも組合教会信者として育てられたことは、すばらしいことであつたと思う。…英国教会にあっては、子供を大変腐敗させるあの世俗的階級制度を免がれることはなかつたであろう。…

要するに、そういうわけで、私は「組合教会の」教育に感謝している。組合教会信者は最も古い非国教徒であり、オリバー・クロムウエルの独立派の末裔である。<sup>(35)</sup>

## VI

エリオットがロレンスの欠点としてあげた「労働者階級の子供として育つたという階級から生じる欠陥」、「教育によって与えられる正しい思考法の欠如」、「非国教徒の宗教的環境の問題」について検討を加えてきた。リーヴィスは、「イギリスの文化的な歴史、イギリスの文明に対するエリオットの無知」<sup>(36)</sup>を指摘し、エリオットのロレンス批判は「偏見と無知の驚ろくべき離れ技」<sup>(37)</sup>であり、「生きた中心的な伝統の環境のうちに育たなかった」人の見解であるとし、「ロレンスは、生きた、中心的な伝統のうちに育つた」という結論を引き出しているのである。

「労働者階級の子供として育つた」ということからロレンスが「無知と粗暴と精神的野蛮さと道徳的不潔さのただ中で育つた」という論理的な結論は出てこないし、「文化的な生活が生み出したより

人道的な成果のすべてを受け継ぐ機会を奪われていた」ということにならないのも事実である。「教育によって与えられる正しい思考法の欠如」に関しても、エリオットは論理的説明をしていない。労働者階級の子供は——その中でも、ロレンスは高い教育を受けていたのだが——正しい思考法を身に付けることができないのかという問題が生じる。

しかし、エリオットのロレンスに対する見解と、それに対するリーヴィスの厳しい反論を考える時、産業革命以後、イギリス社会に出現した労働者階級が果たした役割に対するふたりの評価に大きな隔りがあり、それに文学上の評価が密接に関わり合っているのである。新しい階級はイギリス文学史上どのような関わりを持ち、どのような役割を果たしたかということが問題となる。つまり、イギリス文学の伝統をどのように考えるのかということと深く関係している。

エリオットの言うように、もし非国教徒の宗教的環境が問題であるとしても、ロレンスが「子供を大変腐敗させるあの世俗的階級制度」と言っている国教徒の宗教的環境は問題にならないのであろうか。労働者階級、ロレンスの受けた教育、非国教徒の宗教的環境は、それぞれ個別の問題ではなく、たがいに関連性を持った問題である。イギリス国教会が設立されて以来、国教徒、非国教徒のイギリス社会において果たした役割とその評価の問題がある。この点に関しても、エリオットとリーヴィスは意見を異にしているようである。宗教に関する問題、イギリス文学の伝統の問題に検討を加え、「生きた、中心的な伝統」を明らかにすることが、ロレンスの適切な評価につながるのである。

## 注

- (1) Eliot, T.S., *After Strange Gods* (1934).
- (2) *Edited by Knight, L. C., Mason, H. A., Leavis, F.R., Scrutiny XVIII 1951-52* (Cambridge at the University Press, 1936) p. 68.  
 …I am a fellow-countryman of D. H. Lawrence.
- (3) Tiverton, Father M., *D. H. Lawrence and Human Existence* (Rockliff, 1951).
- (4) *Ibid.*, p. vii.  
 …Lawrence's work needs to be examined from a new perspective.
- (5) *Ibid.*, pp. viii.  
 He was an impatient and impulsive man (or so I imagine him to have been; for, like the author of this book, I never knew him). He was a man of fitful and profound insights, rather than of ratiocinative powers; and therefore he was an impatient man: he expressed some of his insights in the form least likely to make them acceptable to most of his contemporaries, and sometimes in a form which almost wilfully encouraged misunderstanding. If the foolish or the ill-disposed chose to regard him as a blasphemer, a "fascist", or a pornographer, Lawrence would not put himself out to persuade them. Wrong he often was (I think) from ignorance, prejudice, or drawing the wrong conclusions in his conscious mind from the insights which came to him from below consciousness: and it will take time to dissociate superficial error from the fundamental truth. To me, also, he seems often to write very badly; but to be a writer who had to write often badly in order to write sometimes well. After being misunderstood, he is in danger of being ignored. As for his religious attitude (of the development of which the author of this book has something to say) we can now begin to see better how much was ignorance, rather than hostility; for Lawrence was an ignorant man in the sense that he was unaware of how much he did not know.
- (6) *Scrutiny*, p. 68.

Let me recall then some of the things that Mr. Eliot says in that book. I pick on some judgments and assertions that are immediately relevant to the charge of ignorance. 'The point is', we are told, 'that Lawrence started life wholly free from any restriction of tradition or institution...' He suffered 'from a lack, not so much of information, as of the critical faculties which education should give, and an incapacity for what is ordinarily called thinking'. Again Mr. Eliot speaks of Lawrence's 'lack of intellectual and social training'. A reference

to Lawrence's mother tells us, I'm afraid, what Mr. Eliot means by this 'lack of social training': he speaks of her 'vague hymn-singing pietism...which does not seem to have provided her with any firm principles by which to scrutinize the conduct of her sons' — Lawrence was working class, in fact a 'miner's son'; and therefore brought up in the midst of ignorance and uncouthness and spiritual barbarity and moral squalor, disinherited of all the humaner achievements of civilized living. We are to see him as an extreme case of the 'crippling effect upon men of letters of not having been brought up in the environment of a living and central tradition'.

(7) *Ibid.*, p. 67.

If they are expressed now less offensively, they are the more insidious — and the more insidious because associated with a recommendatory approach.

(8) *Ibid.*, p. 67.

...it perpetuates the misconceptions, misrepresentations and misdirections that have already, over so long a period, worked so much mischief.

(9) Eliot, T. S., *The Cocktail Party* (1950).

(10) Bloomsbury Group

(11) *Scrutiny*, pp. 68-9.

To be born, with that genius, a miner's son at Eastwood in the eighteen-eighties — it is as if Destiny, having given him the genius, had arranged also that he should be enabled to develop it to the utmost and qualified to use it for the purpose for which it was meant. If he had not been born into the working-class he could not have known working-class life from inside. As it was he enjoyed advantages that a writer middle-class born could not have had: the positive experience and a freedom both from illusions and from the debilitating sense of ignorance. On the other hand, gifted as he was, there was nothing to prevent his getting to know life at other social levels.

(12) Lawrence, D. H., *Sons and Lovers* (1913).

(13) Lawrence, D. H., *Lady Chatterley's Lover* (1928).

(14) Lawrence, D. H. and Gelder, Stuart, *Young Lorenzo: Early Life of D. H. Lawrence* (1932).

(15) *Scrutiny*, pp. 69-70.

And for those young people in the 1890s their intellectual education was intimately bound up with a social training, which, even if it didn't give them Wykehamist or Etonian or even Harvard manners, I see no reason for supposing inferior to that enjoyed by Mr. Eliot. Moreover, they met and talked and read in a setting of family-life such as, to judge from *The Cocktail Party*, Mr. Eliot cannot imagine to have existed — a family-life beset by poverty and the day-to-day exigencies of breadwinning, yet quite finely civilized. And further, with what advantageous consequences for English literature I have pointed out in some detail, Lawrence knew every day of his life in intimate experience the confrontation, the interpenetration, of the old agricultural England with the industrial; the contrast of the organic forms and rhythms and the old beauty of humane adaptation with what had supervened.

(16) Higgs Farm: Willey Wood Farm in *Sons and Lovers*.

(17) Moorgreen Reservoir: Nethemere in *Sons and Lovers* and *The White Peacock*, and Willy Water in *Women in Love*.

(18) Felley Mill Farm: Strelley Mill in *The White Peacock*.

(19) Lamb Close House: Highclose House in *The White Peacock*, Shortlands in *Women in Love*, and Shottle House in *Aaron's Rod*.

(20) Brinsley Colliery: Beggalee in *Sons and Lovers*.

(21) *Scrutiny*, p. 70.

As for the intellectual training, that Lawrence, I have insisted, did not lack (and Fr. Tiverton says that he has to agree with me here as against Mr. Eliot). Lawrence, we know, was not denied acquaintance with formal academic standards. He says some severe things about Nottingham University College, but he was qualified to make incomparable use of his opportunities, and that he made good use, in formal study, and in informal intercourse, intellectual and social, with his friends, we know. In short, I cannot see on what grounds Mr. Eliot could assume it to be obvious (if he does — and I don't know what else his tone means) that he himself at twenty-one was better trained intellectually than Lawrence at the same age.

(22) *Ibid.*, p. 71.

In the 1920s they used commonly to grant that Lawrence had *genius*; but intelligence, which really mattered — for that you must go to Aldous Huxley. I myself have always felt bound to insist — though it should, I can't help thinking, be obvious — that genius in Lawrence was, among other things, supreme intelligence.

(23) *Ibid.*, p. 72.

...essentially the intelligence of the creative artist.

(24) *Ibid.*, p. 71.

...set forth the conditions of health and wholeness in the psyche.

(25) *Ibid.*, p. 71.

...Lawrence makes plain that without a proper use of intelligence there can be no solution of the problems of mental, emotional and spiritual health.

(26) *Ibid.*, p. 71.

Lawrence's 'insights' were a matter of being able to see what was there, as only genius can, and they went with an extraordinary power of relating insights, and not only of understanding situations comprising elements difficult to get at and recognize, but of understanding whole comprehensive and complete fields of experience. His thinking, in fact, is so much superior to what is ordinarily called thinking that it tends not to be recognized for thinking at all. If 'ratiocinative powers' means anything worth having, then Lawrence's seem to me superlative; in logical stamina, the power to pursue an organizing process of thought through a wide and difficult tract, with a sustained consistency that is at the same time a delicate fidelity to the complexities of the full concrete experience, Lawrence seems to me to be superior to Mr. Eliot...

(27) *Ibid.*, p. 69.

It must be enough here to say that the religion of Lawrence's mother does not deserve the contempt with which Mr. Eliot dismisses it. The Chapel in the Lawrence circle, was the centre of a strong social life, and the focus of a still persistent cultural tradition that had as its main drive the religious tradition of which Mr. Eliot is so contemptuous. To turn, as Lawrence did, the earnestness and moral seriousness of that tradition to the powering of a strenuous intellectual inquiringness was all in the tradition. That the Lawrences were Congregationalists is a relevant point — their Nonconformity was very far from being the debased tin-chapel salvationism that Mr. Eliot appears to think it.

(28) Tiverton, *op. cit.*, pp. ix-x.

...there is a further reason for this book which ought to be presented frankly at the outset: that there does not seem yet to be any full-length study of Lawrence which approaches him specifically from the Christian angle. Lest this at once suggest some form of Inquisitorial literary criticism, it must be hastily be added that the primary object of approaching him from this angle is that, in view of the abuse that has been hurled at him by so many Christians, it seemed that some amends from that quarter were overdue.

(29) *Ibid.*, p. x.

...Lawrence can teach Christians lessons they should have known but have forgotten.

(30) *Ibid.*, p. xiii.

His strictures upon Christianity (and indeed upon Buddhism) are often ill-informed; at other times they go straight to the heart of the matter; and no Christian ought to feel sure that he is religious-minded enough, to ignore the criticism of a man who, without being a Christian, was primarily and always religious.

(31) Lawrence, D. H., *Phoenix II* (Heinemann, 1968) p. 597.

Nothing is more difficult than to determine what a child takes in, and does not take in, of its environment and its teaching. This fact is brought home to me by the hymns which I learned as a child, and never forgot. They mean to me almost more than the finest poetry, and they have for me a more permanent value, somehow or other.

...the poems which have meant most to me like Wordsworth's "Ode to Immortality" and Keats's Odes, ... all these lovely poems which after all give the ultimate shape to one's life; all these lovely poems woven deep into a man's consciousness, are still not woven so deep in me as the rather banal Nonconformist hymns that penetrated through and through my childhood.

(32) *Ibid.*, p. 599.

They live and glisten in the depths of the man's consciousness in undimmed wonder, because they have not

been subjected to any criticism or analysis.

(33) *Ibid.*, p. 599.

By the time I was sixteen I had criticized and got over the Christian dogma.

(34) *Ibid.*, p. 598.

Now the great and fatal fruit of our civilization, which is a civilization based on knowledge, and hostile to experience, is boredom. All our wonderful education and learning is producing a grand sum-total of boredom. Modern people are inwardly thoroughly bored. Do as they may, they are bored.

They are bored because they experience nothing. And they experience nothing because the wonder has gone out of them. And when the wonder has gone out of a man he is dead. He is henceforth only an insect.

(35) *Ibid.*, p. 600.

I think it was good to be brought up a Protestant: and among Protestants, a Nonconformist, and among Nonconformists, a Congregationalist...And in the Church of England one would hardly have escaped those snobbish hierarchies, which spoil so much for a child.

So, altogether, I am grateful to my "Congregational" upbringing. The Congregationalists are the oldest Nonconformists, descendants of the Oliver Cromwell Independants.

(36) *Scrutiny*, p. 70.

...Mr. Eliot's ignorance of the English cultural history, of the English civilization,...

(37) *Ibid.*, p. 70.

...an astonishing feat of prejudice — and ignorance...

(38) *Ibid.*, p. 70.

...Lawrence was brought up in a living and central tradition...

(本学助教授・旭川分校)